

## 平成26年度長崎市提案型協働事業 1次審査会 会議録

- ◆ **日時**：平成26年8月17日（日）13：00～16：00
- ◆ **場所**：市立図書館 新興善メモリアルホール
- ◆ **出席者**

審査委員長	山口 純哉	（長崎大学経済学部 准教授）
委員	井石 八千代	（長崎商工会議所女性会会長）
	今村 晃章	（NPO法人ミディエイド 代表理事）
	小島 昭徳	（長崎市政策監）
	松本 憲明	（長崎市市民局長兼政策監）
	原田 宏子	（長崎市都市経営室）
事務局	市民協働推進室	

### ◆ 1次審査会の次第

- （1） ながさきダンカーズ倶楽部
- （2） NPO 法人長崎ウェルネススポーツ研究センター
- （3） NPO 法人心澄
- （4） 体験楽習クラブ さ～くる

委員長講評

## ◆ 団体発表後の質疑応答

### (1) ながさきダンカーズ倶楽部

#### 【委員】

どうもご報告ありがとうございました。

お尋ねしたいことが二点あります。まずは協働の役割分担の中で、行政側に対して「長く元気で！」のプロジェクトにおけるこの事業の役割を明確にする、これどんなふうなのかお教えいただきたいというのと、それと65歳まで再雇用が進んでいて、そういったふうな感じになっていますけれども。それとかあと、他の団体も同じようなセミナーをやっていることが多いと思うんですが、それとの棲み分けというか、そういうものをちょっと教えていただければと思います。

#### 【ながさきダンカーズ倶楽部】

役割分担につきましては、従来の長崎市がやっております高齢者…65歳以上をターゲットとした色々な政策というのを、打ち出しをやっているというふうなところですね。で、それだけじゃ今回の事業は恐らく通用しないというふうに考えました。全体的な、長崎市のプロジェクト、プロジェクトとダンカーズ、私たちの今までやってきた実績を積み重ねてやることで今回のプロジェクトが上手くいくんじゃないか。というふうなことでの役割分担となってくると思いますけれども。それは私たちが持つノウハウと行政が持っている、これからやろうとしていることを上手くマッチングさせて無駄のできない事業にしたい。それが今先ほど申しました3つのステップ、ガイドブックであり、出前講座であり、フェスタの開催、ということになると思います。

それと、現状いろんな、今、企業において、実際の定年後のセミナーが行われていると思いますけれども、具体的に言うと私もやってきましたけれども、どちらかというと年金の話とか税金の話とか、そういうことに重きを置かれたセミナーということで。「第二の人生をどうやって生きようか」というところはほとんど触れてないというふうなことが現状だと思います。そこで私たちは、そこへ今回はスポットを当てた形の講座なり、ガイドブックといったところを作りたいというふうに考えております。

#### 【委員】

質問は3点です。まず対象者…ターゲットとするニーズですね。これからしようとする事業に対してのニーズがあるのかどうか。先ほど会社からの紹介がありましたけれども、消極的な考え方としては欲しいなというところがございます。2点目、もうダンカーズさんは結構活動されてますけれども、その活動を通していわゆるリタイア後も、いろんな社会に貢献するとかボランティアとか、そういった裾野が広がったという実感があるのかどうか、が2点目。3点目です。ガイドブックの配布先、具体的な配布先をどのように考えられているのか。このガイドブック、今回の事業のメインになると思われますので、大体の活用についてお聞きしたいと思います。以上です。

#### 【ながさきダンカーズ倶楽部】

対象者のニーズがあるかどうかのところですが、これは全国百貨店協会の資料ですけれども、

ほとんどニーズはないんです。感じてない。それはそうだと思います。実際問題、まずは今の目の、仕事であるとか生き方をどうするかということに重点を置かれてて、その「第二の人生をどうやって過ごすか」というところまで恐らくまだ行ってないというふうに考えておりますので。ここに対して少しずつアプローチをしていく、そのきっかけとして出前講座とか、フェスタを使っていく、というふうなことを考えております。

2点目、ダンカーズでの活動での効用といいますか。私たち定年後の世代の「セカンドデビューのすすめ」という形で活動しております。具体的に言うと仲間づくりだとか、自由な時間の使い方の部分だとか、居場所づくり。この前『ダンカーズ』という情報誌でアンケートを取りましたら、定年後何をしたいかわからないという方がたくさんいらっしゃるということが現実的に分かりました。そういったところで今活動をすると、そういう人たちを集めた、それをプラットフォームという捉え方をして、人が集まったことで仲間を作っていくという、という活動を今やっております。

あと3点目のガイドブックの配布につきましてですけれども。今考えておりますのは、3,000部ということで一般の皆さんにフリーペーパーみたいに配布することはちょっと難しいなと思っております。例えば市役所の窓口であるとか、ランタナの窓口であるとか、すこやか支援課さんの窓口において希望者にとっていただく、というのが一般的な配布の仕方。あとは自治体とか企業へ出向いて行って、私たちが具体的に手渡しをしながらそれを使った講座で使っていく。というふうなことを今考えております。

#### 【委員】

セカンドライフの話ということなんですけれども、先ほど「今のところニーズはあるのか」というところで「そんなにも可能性もある」ということで。結局普及啓発をしていかないといけないという段階なんだと思うんですけれども。いわゆるその世代の方はどちらかというと考えてないという話、分からないという話なのか、あるいは気付いてないという話なのか。それがちょっとどちらなのかな、というのか。事業の関係というよりはいわゆるテーマの課題という部分だと思うんですけれども。単純に、その辺はどういうふうにお考えでらっしゃいますか。

#### 【ながさきダンカーズ倶楽部】

この前長崎市の研修に出まして。川北秀人さんという先生が「事業はニーズがなきゃ駄目なんだ」ということをおっしゃいました。ただ今回いろいろと企画・提案するにあたっていろいろと調べましたら、恐らく私たちがターゲットとする世代は、あまりニーズに気づいていないというふうなことだと思うんですね。というのは、これからの生活…先ほどデータがありましたけれども、長崎市のこれからのこういうふうな人口構成といったところから恐らく少しずつ話をしていかないと、あと15年先、今55歳が10年経ちますと65歳になります。ちょうど高齢化の社会、高齢化となりますね。というところで、社会の在り方は恐らくまだ全然自分でイメージしてないんじゃないかなと思います。そういう部分で少しずつこれを機会に長崎市と一緒にアプローチをしていく。そのきっかけづくりじゃないかなというふうに思います。ということは1年2年ではなかなかこの事業は上手く成果が出るというのは難しいかなと思います。

### 【委員】

今、お話をお伺いしたので追加でお尋ねしたいんですけども。

若輩者が言う話ですので、非常に、気分を悪くされたら申し訳ないなと思いながらちょっとお尋ねしたいんですが。これまでも、結局50年間60年間自分で人生を考えて生きて来られた方々だと思うんですね。そういう方々が、じゃ定年後に分らないとか、迷うとか、そういうことってというのは実際あるのものなのかどうか。何かしら選んで自分でやっていくんじゃないのかな、ということをおっしゃるはする訳なんですけれども、そのへんはやっぱり何か違う部分があるということなんですね。

### 【ながさきダンカーズ倶楽部】

それができる人は、それができてるんですね。ただ、できない人がいらっしゃる。そういうのは、やっぱりみんな背中を一緒に押してあげるといこと、きっかけが必要だということ、私たちがこの活動を8年間やっておりますけれども、気づきました。そのためには、やはりみんなが集まる場所だとか、そういう情報の提供だとか、仲間を作っていくということが必要だと。だからそこまで行く手前として、現役の時から、定年になってもこういうふうな生き方があるんだよという。それに向かって上手く離陸していくとか、向かっていくというふうな仕掛けが必要じゃないかなと考えております。

### 【委員】

今までダンカーズという冊子を作って来られまして、それは社会貢献に向けたものだと思うんですけども。今回のガイドブックの一番力を入れたいところはどこでしょうか。先ほどいくらかのカテゴリーがありましたが、「長く元気で！」というところから見るとどこにやっぱり力を入れたいと思ってるのか。

### 【ながさきダンカーズ倶楽部】

それは、定年後、今は60になっても65まで働ける時代にはなっておりますけれども、その65になってから何かをはじめるというのはすごく精神的にも肉体的にもきつい部分があると思うんですね。その前のところ、現役の時からそれに向かってイメージを作っていくとか。自分がイメージを作っていくことで上手く60になって、65になってから第二の人生に入っていく。そうすることでやはり自分達が楽しくわいわい言いながら元気なものをつくっていくんじゃないかな、と。やはりそのためのガイドブックの作り方にしていきたいなと思っております。これについてはまださっき30…32ページの内容を申しましたけれども、まだ今これは私の頭の中のプランでありまして、これはあと半年抱えてですね、具体的に作って行って、作成に取り掛かりたいと思います。

## (2) NPO 法人長崎ウェルネススポーツ研究センター

### 【委員】

ノルディックウォークの普及について

### 【NPO 法人長崎ウェルネススポーツ研究センター】

現在、佐世保で盛んに行われているが、市内ではまだまだの状況。  
当団体の3人とノルネス長崎とで実施していく。

### 【委員】

事業スケジュールに②とか③とか④とあって簡単に書いてあるんですが、1クール5回シリーズということで、これは例えば1・2ヶ月で集中して終わるといったことなんですか？この書き方を拝見するに。

### 【NPO 法人長崎ウェルネススポーツ研究センター】

事業スケジュールは、だいたいスタートの開催の時期を記載しています。

### 【委員】

はい。それを、例えば何ヶ月間に渡ってという感じですか？

### 【(特非) 長崎ウェルネススポーツ研究センター】

はい。教室を4つ考えてるんですけども、スポーツツーリズム、多世代交流に関しては、2週間に1回程度というふうに考えてます。例えば3ヶ月程度で終わるといようなかたちで。もうひとつの公園活用と斜面地の活用に関しては、週に1回ですので、1ヶ月で終わるようなタイムスケジュールで考えております。

### 【委員】

先ほどの質問と関連なんですけど、普及ですよ。この事業の目的を達成するためには、いかに市民の方がウォーキングを実践したいという意向が強いと、そのためにノルディックを選択されたわけですね。ですから、いかに市内に普及していくのかというプロセスとあと自信。もう一点がですね、ウォーキングを実践したいという市民の方がおられるからノルディックという結論に達したと思うんですが、他の選択肢もなかったのかどうか、そこの比較もされたのかどうか、この二点です。

### 【NPO 法人長崎ウェルネススポーツ研究センター】

一点目はいかに普及するかということですね、私たちランニング教室を行っているんですけども、そこで感じたことが、市民さんが見てる中でたくさんの方が走るとか、歩くとかそういったこと、目につくような教室の展開をすることで、「あれは何だろう？」ということ、少しずつ興味を持たれることがありますので、できれば、色んな所で目立つようなかたちで、市民の方

に目がつくようなかたちでノルディックウォークの教室を展開していったら、もし興味を示されれば、また次年度の教室開催のときに参加者が増えるんじゃないかなというふうに考えています。

あと、なぜノルディックウォークかという点、先ほどもちょっとお話したように、アウトドアスポーツというのはけっこう今人気があって、ランニングで言えば、登山に向けたようなランニングであったりとか、そういうものがかなり人気があるので、今回は身近にできる歩くという作業から、そういうアウトドアスポーツを感じてもらおうということで、ノルディックを選択しております。私たちも色んなスポーツを普及しておりますので、今回はとにかくこの事業に関して言うと、ノルディックに焦点を合わせてみようかなというところですよ。

#### 【健康づくり課】

健康づくり課の藤島です。先ほどの普及に少し関連するんですけども、やはり成果をどうしても…一次プレゼンを通して、私たちと協働というかたちをとるかと思うんですけども、やはり何事も成果を求められます。何か成果の指標みたいなのを今の時点でお考えがあれば、教えていただきたいと思えます。

#### 【NPO 法人長崎ウェルネススポーツ研究センター】

平成29年度までにスポーツの習慣なり、人を50%にするという長崎市の目標があると思うんですけども、多分それに対して、調査もされますよね？これは、今後できるかどうかは行政の方の話になるかなと思うんですけども、例えば、調査の中で行政のほうからスポーツの種目みたいなところも聞いていただいて。ノルディックウォークがどれぐらい普及したか、普及していくかっていう率とかを出せば、平成24年度には長崎市民のスポーツ調査を我々やっていますので、そこでのウォーキングの実施率とかいうのは分かっておりますので、そのウォーキングと比較して、どの程度普及してきたかっていうところを把握できるんじゃないかなというふうには思っています。これはあくまで、今後の対応次第ですけども。行政と連携を取りながらやりたいなとは思ったんですけども。

#### 【委員】

プレゼンテーションありがとうございました。

事業を実際にやるという話になると、実施をする…実施の体制とか、今組んでる計画通りにやれるかどうかとところがあるんですけども。実際に団体さんの事業報告、出していただいているものとかを見たりすると、ノルディックウォークに関する事業自体は、特になさってらっしゃらないということだと思えるので。実績に関する部分とか、あるいは実施にあたって上手くいっていった部分、あるいはちょっと不安なんですっていった部分も含めて、よかったですらご意見いただけると。

#### 【NPO 法人長崎ウェルネススポーツ研究センター】

実際にこれまでの年度の中では、ノルディックウォークに関する教室・クラブ等はやったことはないです。ただ、他の団体さんからのノルディックウォークに関する講師依頼は受けておまして、例えば長崎さるくの団体さんから講師を受けたりしておりますので、ノルディックウォー

ク自体の展開は大丈夫なんじゃないかなと思うんですけども、やはりノルディックを使つてのウォークになりますので、教室を展開する場所の設定っていうのが非常に困難を極めるといふか、安全に、しかも人に見て欲しいという点もありますので。そういったところのコースの設定に関するところが、ちょっと私たちも不安なところなんですけども、そのあたりは、健康づくり課さんがロードウォークサポーター等でウォーキングのコースマップを作成されたり、健康遊具のところで色々な場所をご存じですので、そのあたりを一緒に相談をしながらですね、やっていければなというふうなところが…そういうふうな展開でできればなと思っております。

**【委員】**

予算書の中でなんですけれども、報償費の中で講師謝金が計上されてるんですが、この講師っていうのは、ご自分たちのメンバーで…メンバーだったら専門的な人件費なのかなと思うんですけども。これはどの講師なのか？

**【(特非) 長崎ウェルネススポーツ研究センター**

ノルネス長崎さんがお持ちの講師をできれば多く活用したいという気持ちがありますので、そういったところの方々の講師を依頼するようなかたちで考えております。

**【委員】**

そうですね。講師を有してるのが団体の強みだと思うので、もちろん外部からの講師は謝金でよろしいんですが、ご自分たちの場合は、専門的な人件費ということでの計上のほうが好ましいかなと思いますので。よろしくお願いします。

**【NPO 法人長崎ウェルネススポーツ研究センター】**

分かりました。

**【委員】**

現在ですね、おそらく県のほうの協働事業のほうにも依頼をされていまして、そちらも審査中だと思うんですが、これはもう内容は全く違うっていうのはよく分かるんですが、仮にですね、県のほうも通ってですね、こちらも通った事業を実施するっていう際の人員とかですね、事務処理等も含めた人員の体制とかそれが実現できると、お互いに干渉し合っとなかなか動かないっていうことがないのかどうか、それだけちょっと確認させてください。

**【NPO 法人長崎ウェルネススポーツ研究センター】**

一応私ども今、2人は専門的なというか、事務職、あと研究専門員を雇用しておりますので、そちらでだいぶ事業自体は進めることは可能かなと。ノルディックの指導のほうに関して言うと、我々がどうしても関与できない部分に関しては、ノルネス長崎さんとの共同できちんと教室を展開できればなというふう考えております。

### (3) NPO 法人心澄

#### 【委員】

今回の事業のターゲットとしている民生委員の方に、ひきこもりの対応などについて話をしたことがあるか。

#### 【NPO 法人心澄】

このことについて話をしたことはないが、ひきこもりの方は地域の中にいらっしゃるのでも民生委員の方も意識としてあると思う。

#### 【委員】

今回の事業におけるひきこもりの方の年齢層はどのあたりを想定しているのか。  
ハンドブックの内容は、専門的なものなのか、一般的なものを考えているのか。

#### 【NPO 法人心澄】

ひきこもりの方について想定している年齢層は、10～20代と考えている。  
ハンドブックの内容は、ひきこもりの方にどう関わったらいのかという部分に重点を置いたものを考えている。

#### 【委員】

先ほど、民生委員・児童委員に対象を絞った、原田委員と話が重なるかもしれませんが、対象を絞った理由については地域にいらっしゃるということが1つアプローチとしてあるということころなんだと思いますけれども、他にも民生委員・児童委員さんを今回対象にした理由は色々あるとおっしゃってらっしゃったので、その色々をお尋ねできればと思ひまして。何かきっかけがあられたというのであればそれをお伺いしたいと思います。

#### 【NPO 法人心澄】

1つは民生委員さん・児童委員さん、やはり非常に数が多い。長崎市で2,000人ほどいらっしゃる。恐らく長崎市で引きこもりの方が6,000何百人いると言われてはいるんですけども、もっと多いのではないかなと思うのですが。で、一カ所に集中しているのであればそれでいいとは思いますが、散らばっているわけですね。ということはやはり、1人でも多くの方に伝えてゆきたい、と。そうなってくると長崎市内で2,000人の方に伝えるチャンスがあるというのは、これは非常に大きなメリットがあるのではないかと考えております。

#### 【委員】

なるほどですね。他にもありますか。今のところは特にはないですか。

#### 【NPO 法人心澄】

はい、今のところは。



【委員】

はい。わかりました。ありがとうございます。

【委員】

どうもありがとうございました。

講座についてお伺いをしたいのですが、先ほど民生委員さん、合わせて2,000人いらっしゃる中の500人ということで対象者がなっているんですけども、講座の参加目標が500名ということですか？

【NPO 法人心澄】

はい、そうですね。

【委員】

それはどのような選び方と言えればおかしいですけど。参加される方は全てという感じで捉えているんですか。それとも人数を決めてとか。例えば20回を開催予定となっていますけど、これはお1人1回だけで終わるのか、それとも何回かされるのか。時間数とか、そういった講座の内容についてお伺いできればと思ってるんですが。

【NPO 法人心澄】

まず、人数について何ですけれども、それは、何人くらい参加していただけるのかというのは見通しが立ってなくてですね。500名くらいには参加していただきたいという思いを込めて…。その辺は数の根拠はございません、申し訳ないです。

20回というところなんですけれども、本当はもっとできればしたいと考えてはいますが、実際何回くらいできるかと言われたときに、20回。半日行うとして20回ならいけるかな、という計画で20回というふうにしております。

【委員】

1回ずつお越しいただくのが良い、という感じになるんですか。1回。それとも何回かに分けて？

【NPO 法人心澄】

基本的には1回ごとにと考えております。そして、2回、3回と分けさせていただけるならもちろんそれはそれでいいと思うんですけども。ただスタッフの体制として、それだけ長期的に何度もやるというところは現状としては難しいのかなと。多くの方に、と考えた時にまずは広くということで、20回というふうと考えております。

【委員】

ありがとうございました。

**【委員】**

今回長崎市と初めての試みとなる協働事例ですよね。長崎市と協働することで波及効果と言いますか、お互いの強みを生かすという意味での、具体的な効果に期待したいのは何でしょうか。それは継続性・発展性も含めてお答えいただければと思います。

**【NPO 法人心澄】**

一番の期待としましては、行政と連携を取って、今後の支援を共に考えさせていただく、そのきっかけをとというのが気持ちとしての一番大きな部分になります。ガイドブックに関しては、今回ここに挙げさせていただいているところにはなりますけれども、事業ですね、講座とガイドブックに関しては。私としては今回のことをきっかけに、計画の一番最後にあります、担当課さんと中長期的な支援計画を共に考えていって、そして、数年間に及ぶ支援を安定して提供していく。その入り口というふうに考えております。

**【委員】**

その他、いかがでしょうか。もしよろしければ、担当課の方から何かございますでしょうか。

**【地域保健課】**

今後の事業展開の中でひきこもりの支援サポーターといった支援をする方たちの養成講座とか、そういったものを展開する予定があるのか考えてらっしゃるのか、というのは1つ。

**【NPO 法人心澄】**

養成サポーターの件について、私たちの当団体としてはしたいという考えや気持ちはありますし、必要性も感じております。ただ、今そこに踏み切れない理由としましては、支援の養成講座をした、と。そしたら数年間にわたって長期的に関わっていく必要があると思っております。サポートをしていくと。当団体としては、それをしっかりできますよというスタッフはまだまだ少ないのかなと思います。当団体は今常勤の相談員が4名おります。そのサポートを出来るだろうと考えるスタッフが2名。ただ、そのうちの1名が私だと考えると、いろんなところで必要な支援を行っていく、そして当事者の方への支援を行っていくと考えると、まだそこまでの規模ではないのかな、と。ただ、2年後、3年後はそういったところに手を付けられるといいなと考えております。

#### （４）体験楽習クラブ さ～くる

##### 【委員】

役割分担のところでご質問ですけれども、先ほどパワーポイントの中に役割分担のところがありましたけれども、行政側の役割分担として政策提言・政策の実現ということを書いてある訳なんですけれども、これは政策提言をするのは団体側のほうということですよ、という話になりますよね。行政が行政にやるって話だとおかしいことになるので。団体側がこの事業を通して、いろんなアイデアだったりノウハウだったり仕組みだったりというところを提言していくということを、行政側としては実現していくというところの努力をしてくださいというふうな解釈で大丈夫ですかね。というところの意味ですか？

##### 【体験楽習クラブ さ～くる】

はい。

##### 【委員】

今のプレゼンで、今回の事業の内容というのがあまり触れられてなかったんですけれども、今回の学習支援に対しての詳しい内容を教えてください。

##### 【体験楽習クラブ さ～くる】

具体的なところが・・・、パワーポイントの中にもあったんですが、今現在考えている事業内容については、平日の金曜日、それから週末の土曜日・日曜日の中で、先ほどお伝えしたような発達の背景を持つお子さんがた、小学生・中学生の方をマンツーマンで教科学習のサポートをする事業です。何故マンツーマンである必要があるかというのは、先ほどお伝えしたように、それぞれの、ひと口に発達障害と言っても様々な特性や理解の仕方があるので、という部分と。彼らの中でまず難しいところは、まず学習に入る前にやはり1人の安心感をしっかり持てることと、どうして学習しなくちゃいけないのかというモチベーションをなかなか持ちえない子たちも多いので、そういう意味では年間を通じて基本固定の担当の中で、マンツーマンでやっています。現在私たちが独自に行っている事業については、今10名ほどの参加者の方がおられて、そのような教科学習をやっている形です。

今回の事業を通してそのような場所を、私たちがやっていることだけではなくて、必要な地域などにも広げていくことと、そのような人材育成をしていくこと。そしてニーズに対して受け皿がしっかりできるような環境を作っていくことなどを目指してやっていっております。

##### 【委員】

学習支援の先生というか、学習を支援するのは大学生ということなんですか？さ～くるさんの体系から言うと、大学生が入れ替わり入れ替わりになるような気がするんですけれども、それが先生になるというふうに理解していいのでしょうか。

##### 【体験楽習クラブ さ～くる】

そうですね。現在、それからまたこれからもなんですけれども、関わっている学生たちが主体であります。教育学部の学生とか、医学部の学生ですね。で、彼らが将来教員になるときなどに、そのような子どもたちと関わる時にも活かされる部分もありますし、学生たちと言っても、ただ学生たちに任せるだけではなくて、特別支援教育士の方の研修を受けながら、研修を受けた学生が担当になったりします。

今、長崎県下の中で発達の背景を持ってるお子さんがたの学習支援ができる場所は何カ所かありますが、基本的には教員の方たちが指導に当たっていたりという中で、平日での実施が難しかったり、実施頻度がなかなか持ちにくいという状況があります。学生たちを主体にすることの良さは、1つはそのような実施頻度を作ることが出来るということと、先ほど、まず人間関係とか安心感とかいう話があったと思うんですが、世代の近い学生たちというところが学習のことだけでなく、それを軸として関係を結んでいくことが非常に大きな意味があるというところでやります。

#### 【委員】

先ほど、もうすでにサポートセンターは中学生以上が対象で、今度の楽習クラブは小～高校生くらいで、学び方も違うというお話をされたんですが、今のスタッフの方で、例えば、説明の中に「ニーズがあればその場所も増やしていきたい」ということで、どんどん広がっていくときに、スタッフの数が足りるのか、というのが一点と。

あと、銭座地区のコミュニティセンターの方で提案事業の内容の書いてあるところの予算額、収入支出とともに、ということで総額 102 万 3,200 円というのを書いてありますね。これと今度の予算額が若干…。これはどういうことで考えられているんですか。

#### 【体験楽習クラブ さ～くる】

これは文章の中の方が間違いです。すいません。

#### 【委員】

そうですか、はい。それとあと、今後の展開というか。例えば市の負担金が補助金となった場合は、補助事業として実施すると書かれているんですが、例えば採択されないとか。あと他にどういった取り組み方をされているとか。そういったのもお聞かせいただきたいと思いますが。

#### 【体験楽習クラブ さ～くる】

ニーズがあったときに私たちだけではそれをカバーできないというのは重々承知なので、企画書の中にも書いてるんですけども、例えば今長崎市の福祉サービスの中で放課後等のデイサービスなどがかなり場所が広がってきているんですけども、そういったところで宿題とかにとどまらずに、教科学習の支援のニーズがあるお子さん方についてそれをもっと深く答えられるような、デイサービスのスタッフなどの研修もそうですし。実際、彼らがどういったところに行ったりするのかと考えた時にですね、一般の学童保育などに行くのが難しい方がデイサービスに来ることが多いんですが、一般の学童保育とかに行ってる子たちもいたりとか。児童センターなどに放課後いる子もいたりとか。そういうようなそれぞれの地域の中で彼らが放課後過ごすような

場所とかの中でしっかりと対応ができるようにというのと。あと家庭教師的なニーズも結構ありまして、それぞれ自分たちの住んでいるおうちとかに学生などが行けるような仕組みを作ることなどもできればな、というふうに考えてます。で、あとは、もう1つ？

**【委員】**

例えば、補助事業でもやりたいというふうに書かれているんですが、他に例えば、違った取り組みを考えたことはないのでしょうか。

**【体験学習クラブ さ〜くる】**

この事業については、私たちだけでやる分については、いろんな助成金などでし得る事業かなという認識があります。ただ、先ほど申し上げたように、ニーズはかなりあるので、私たちだけではカバーできないという状況があるので。そこをちゃんとニーズに添えていくためには、私たち単体ではない広がりを見出す必要があつて、そのために今回協働事業という形をとってますので。私たちだけであれば、労力とかいろいろ考えても、普通に助成金などでやったほうが良いかなと思うんですけども、実際この広がりというところが今回大きな目的となるので、ぜひそのような形を作っていければいいなと思っております。

**【委員】**

じゃあ他のことは考えずに、まずはこれでという感じで思ってもらっちゃるということで。

**【体験学習クラブ さ〜くる】**

そうですね。もし難しいときには、まずそれが広がっていくということが目的ではありますので、また何なりか考えていければと思います。

**【井石委員】**

ありがとうございました。

**【障害福祉課】**

先ほどから発達障害の話が出ておりました。現状としては先ほども吉田さんの話にもありましたとおり、今、施策としては、発達障害を重点施策で我々取り組んでいると。それはもう医療面、診断とか発見をして治療するという面と。あと福祉的な要因ですね。今おっしゃったような放課後デイサービス事業とか。児童福祉法も改正されてですね、かなり発達障害者の方も利用されていると。供給の面においても、学校現場の方で教師のそういった資質を上げていくと。いろんな研修をして。そういった取り組みも進めている訳なんです。それで、今一つ、市民協働でやるというふうな大きな目的が、もう少し市民協働のそういう意義とかを聞かせて欲しいというのが一点。発達障害に特化していくのか、あるいは発達障害までは至らないが、いわゆるグレーゾーンみたいなそういうところも想定されているのか…今一つ。もう一つ言えば、どの点で重視していくかですね。福祉的な支援なのか、教育的な支援なのか、あるいは医療とか専門的なものなのか、そういったところが非常に分かりづらかったもので、その辺を説明していただければと思い

ます。

#### 【体験学習クラブ さ〜くる】

お時間がきているので、簡潔にですね…。この市民協働の意義については、ニーズがこれだけあるということ。それから、そういったことに対してそれに取り組もうという方たち。実際に取り組める状況・場所・人。そういったものを作ると考えた時に、私たち NPO だけが単体で学校関係に働きかけたりだとか、そういうのはなかなか難しいものがありますし、そういったところで広くニーズを把握することと、実際それが広がる状況を作るというところで協働の必要性を感じています。

発達障害は、特にそれこそグラデーション的な感じなので、診断名がつかなくてもほぼ傾向を持っている方たち、ですね。実際に学び方が違うというところを考えた時に、診断名はついていないけれどもほぼ同じような難しさとか傾向を持ってらっしゃる方に関して、彼らの方がむしろ埋もれやすかったりするので、そこに対しては答えていくことを視野に入れながらですね。原則その背景・特性を持った方たちで、ということですね。

あとは、その医療福祉あたりというのは横断するのかなと思ってます。というのは、教科学習なので教育の分野ではあるんですけども、何故教育学習を軸とするかということ、それが本人たちが自己イメージを下げてしまったり、自分の可能性を活かしていく上でハードルになってしまっている状況があるので、彼らが自分の持っているものを活かしてハッピーな状況になったり、保護者の方や本人がそういう不安を持たずにすむように。状況を作るために必要なかなということ。分野で言えば、大きく言えば福祉。その人がハッピーに暮せるようにということになっていくのかなというふうに認識しています。

## ◆ 委員長講評

お疲れ様でした。一言だけ、委員長として、講評とまではいきませんが今日の感想を述べたいと思います。

今回4件の協働事業、行政提案1件と市民提案3件ありましたけど。いずれも協働に際して、誰が見ても多分必要なんだろうなというテーマが挙がってきたかと思います。理由はもうはつきりしてまして。4件とも実は見えない問題を相手にしているところなんですね。これはリタイアされた方が老後の人生をどう歩んでいくかと、これをわからなかったり考えていなかったりする。これは我々もそうですよね。常日頃から65歳、70歳以上の過ごし方を考えながら日々生きていくわけにはいかないという部分もありますので、なかなか難しいという部分で見えないです。あとは健康の件も、我々は普段は気づかない、毎日やっぱり生きるのが精いっぱい。健康づくりが大好きな人というのもいらっしゃるでしょうけど、それ以外の人はほとんど配慮しないまま生活をして、気づいたら何か病気になっているとかですね、そんなこともあると思います。3番目、4番目の心澄さんとさ〜くるさんのところも、子ども達の問題。家族とか学校の先生は知ってても、我々一般市民が目にする事耳にすることは当事者にならない限りほとんどない。そういう意味では、4団体とも普段我々の生活の中では見えない問題とか課題とかに対応していると。日常的に見えない問題とか課題であるからこそ、多分行政だけがやっても何も成果は上がらないから、市民の力を借りましょうという話が出てくるんじゃないかなというふうに思いました。

それが、4団体とも見ていただいたら分かりますように、これはすいません、皆さんのお手元には企画書がないかもしれませんが、行政を含めそれ以外の団体との協働と。要は、自分達だけが、市民がいくら1人でやろうと思ってもできない部分はあるから行政も含めて他の団体の手を借りましょうというような提案になってたかと思います。そういう意味では、毎年、この提案型事業やってますけれども、本日の4団体というのは、…すいませんこれは何も、一次楽々突破ですよ、と言っているわけではなくて、テーマとしては非常に大きな協働のテーマを持ち込まれてるんじゃないかなと思います。

だからこそなんですけど、今後、一次この審査を通るかどうかは別にして、多分見えない問題だからこそ、行政と市民活動団体では捉え方が全然違うと思います。いかに市民の参加が必要だと言っても、そこには明確な役割分担が必要だと思いますし、行政と今回発表された団体だけではできないところについては、ほかのところから必要なものを調達するというようなところが必要なのかなと思います。

いずれにしる4点とも非常に素晴らしいプレゼンテーションだったと思います。10分という非常に限られた時間で本当に申し訳ない。本当は30分40分でもじっくりお話ししたい部分もあったかとは思いますが、10分という限られた時間で多くのところが、「こんなニーズがあって、こんなシーズがあって、要はこんな実績があるからこれに対応できるんだ」ということを言おうと努力していただいたかなというふうに思います。

このプレゼンテーション終わって、結果は後日事務局からご連絡があると思います、後日ということになりますが。二次に進むところも、そうじゃないところも非常にいいテーマ、非常に大事な長崎市にとって大事なテーマに取り組んでらっしゃると思いますので、今後の活動・協働が更に進むように頑張ってくださいと思いますし、我々審査委員も何かお手伝いできることが

あればしていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。  
本日はどうもありがとうございました。